

読物

四国霊場医王山薬王寺

「鳴門秘帖」の舞台になつた物語

平田 土半 (戯書)

(佐田市太平志)

徳島県日和佐町にある医王山薬王寺は、四百八十八ヶ所第廿三番の札所、霊場第一番鳴門市の霊山寺からはるかに遠く、阿波での打止め寺である。

日和佐の町、中央部の通りから、バスも自家用車も広い舗装道路を、山門前まで染々と詣ることができ、門とくぐると、庫裡・鐘楼などがある。

本堂へは、まず三十三段の女厄坂、次は四十二段の男厄坂、いずれも立派だが急坂、開運厄除を願う通路たちは、一段毎に厄銭を置いて登る風習があり、硬貨で足の踏み場もない。しかし誰一人それを捨てるものはない。厄を捨てることになるからだ。

本堂は、大師堂・護摩堂と並んでいる。本堂には前向きと後向きに二体の薬師如来が安置されている。

この薬王寺は行基菩薩が開基といわれるが、その後弘仁六年(八二五)弘法大師が詣で、四十二歳の厄除けを願って薬師像を刻み、本尊として安置したそうだが、それ以来ここは厄除け祈願所として栄えたという。

ところが文治四年(一一八八)火災にあつて焼失、火勢が猛烈であつたため本尊を持ち出すことができず、一同茫然としていたが本尊は光りを放ちながら、今更の院にある玉厨子山へ飛び去つた。後本堂の再建になり、別に本尊が中興の玉厨子山へ飛び去つた。後本堂の再建になり、別に本尊が中興の玉厨子山へ飛び去つた。

の本尊も帰つて来て、堂内に後向きに納めた。従つて奉拜者は前と後から礼拝せねばならぬ。

本堂から更に石段を六十一段登る。これは還暦の厄除坂で、やはり厄除銭が置かれてある。

上りつめたところ、平和と幸福を授ける輪放燈が、青空に高くそびえている。

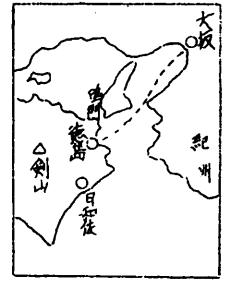
ここからの眺望は格別である。近くに見える大浜海岸には、毎年時期が来ると赤海亀が上陸して産卵する。(天然記念物として保護されている) また絶好の海水浴場としてそれは、さらに南方阿南海岸の奇景怪岩を伝へて土佐へとつづくのである。

吉川英治の有名な長篇小説「鳴門秘帖」は、ここ日和佐の薬王寺が波札社、悲慘乱闘の舞台となつている。

阿波蜂須賀藩は、密かに西国大名と謀り合ふ所があり、他国者を入国を拒み、万一潜入する者があれば、捕えて剣山の石牢に入れて粗衣粗食、きわめて不自由な目にあわせて死ぬまで出さない。しかし決してそれを殺害しない。殺せば国に祟りがあるとの伝承で固守されていた。これは厳しい藩の鉄則であった。

幕府の徳田甲賀世阿弥は、その禁を破して十一年前河波に潜入、捕えられて今剣山の窟窿に在って、不自由なわけを過している。生死不明だが、江戸ではその消息を知りたいと秘策を練っている。

見返りのお綱——実はその世阿弥の長娘——は、当時女ヌリとして天下のお尋ね者だが、世阿弥の高弟最右衛門の法月強之丞と共に、万難を排して今剣山の現状を探るため江戸を出立した。それを知つた河波の郷士十夜孫兵衛は、旅川周馬・天堂一角の両剣士と共に、途中で打ちあつたと見せ、大反、争うよびて食費の返済に終つた。



あつたが、何時も不首尾に終つた。阿波へは、大坂から海路舟行による外、他に途はない。その船使は嚴重な監視で、藩の舟船でも意の如くならぬ。何時便船があるかも極秘である。吳越同舟、一方は密行、一方は國方の援助もうけて、多數の助太刀もある。是が非でも阿波への渡航を阻止しよう。たとえ味方への幾人かの犠牲者も止むを得ないと、船主、海上取締りの諸役人一同も、暗々裏に怪しい者と詮議している。しかし法月、お綱の兩人が大坂まで来たことは見届けたが、それきりさつぱり消息不明。今度の便船でない限り次の便はいつとも決っていない。

孫兵衛等三人を中心とする阿波方の面々も、とにかく徳島に着くまでには、海上で何とか始末をつけることに一決し、同志一同にそれとなく決意を告げて、まず船中くまなく探索を嚴重にして、大坂最後の拠点天保山をはなれた。

出帆當時は天候も心配なかつたが、夜となり陸地が遠ざかる頃から風が出て、波は荒れ出しやがて暴風雨と化し、航行危険な大特化となつた。秘策の限りを尽して船底深く積荷の中に潜入していた法月、お綱らしいものの発見されたのもこの時である。

船中は、忽ち殺気あふれた修羅場と一変した。まっくらな夜ではあるが、船は鳴門の大渦にかかつているらしい。多勢に無勢、いかに腕のすぐれた玄之丞も絶体絶命、北死に一生の生か死か、乱闘に乱闘、船中列る所に死傷者が転がっている。逃げようにも荒れ狂う海上、さすがに猛剣士も、このままで生きては居られぬ、斬られて死ぬより日は最後の決断、お綱を抱きよせ、暗闘の海中

に、秘刀を片手に、場所も方向もわからないまま身を投げた。

まさかと思つた阿波方の捕手、あわてて夫々海上を見廻し友が、目に入るものは大荒れに狂う大阿波吉けである。「恐らく助かるまい」と一息ほつとしたものの、決して安心したのではなかつた。

夜が明けて、船は辛うじて徳島に着く。船中は勿論、これを迎える港の警戒は一層嚴重である。探索はなお数日つづいたが、それきり兩人の消息は杜絶してしまつた。恐らく溺死したのだらう。しかし阿波の海岸、船着場どこにも兩人が漂着、あるいは死体の屍も確証はなく、日かたつに從つて、五里霧中、送客入りの状態になつた。

それから五十余日が過ぎ、南國らしい夏が早々訪れた。阿波全城の代官や手先、町同心たちは、藩命のもとづいて、血眼で手落ちなく詮議をへづけたが、生死は全く不明である。

代官の手先で、國中で税利きの第一人者、釘ぬきの眼八という男だけは、職業的な興奮を起えて、一種の功名心に燃えて密かな活動をつづけていた。

徳島に、大黒宗理という有名な刀剣研師がある。眼八はある他の用件でそこに立寄つた時、たまたま船大工の手間取りという若者が、二本の刀を愛け取つて歸つて行つた。眼八は四方山の雑談の末、それが無銘の長刀で新藤五という小脇差で、すばらしい名作ということだけ聞き止めた。船大工風情の手にある逸物ではあるまい。強いて頼み主は——と受託台帳を調べてもらうと、海部日和佐の宿、大助という棟梁の名となつている。日和佐には

腕の立つ研師がいないので、わざわざこの城下まで持って来たということが判って来た。潮びだしになつたのを、鞘・柄糸・楾上げまですっかり手入れを入念にし、宗理の手元で五十日ほどかかったとアことである。いらいろ考合せしてみると、あの日から四五日後に相当する。

眼八はとにかく使いに来た若いものど引捕えて見ねばならぬと、問髪をいれず土佐街道を南下十四里、日和佐の宿に素一飛んで海部代官所に入り、旅職人に風体を変装して、四國第二十三番の札所薬王寺詣りの白菰通路に交り、衣れま鈴の音とご鉢歌の流るる中を、とある門構えの格子先に腰をおろした。棒の先に「大勘」と彫つた標札がかかつている。代官所でくわしくこの家の事情は聞いていたが、あくまで旅の滞り者を装って、恐る恐る「ごめんなすって……」と声をかける。手取りがぬ弟子らしい若い者があらわれた。

ていねいに頭を下げて、気易く一宿一飯を乞うた。大勘は数日前から留守、外儀は道所の者と通路に出ているという。眼八はいらいろ推談したあげく、一分銀を一つ包んで渡し、それとなく猶とをぐって見る。へまり五十日ほど前、時化あがりかまた降りつづく雨の宵の口、頭から酒蒸をかぶつた気食入のような既成の旅人らしいものが、一人の女をつれて来た。大勘は、代官にもてなしていたが、翌朝はもうどこに立ち去つたか。誰も知る者はなかつたというのである。

やがて両者の間いらいろなるなやりとりがあつた後、眼八は旅用の風呂敷包及びを解いて平糞を取り出し、「これに先日徳島のある家で会つた、ご当家の印はんでんと着た若い方が落としたもの、拾つて検べて見ると源の字が刻んである。心あたりの方はあるまいか。幸い今度当地に來たので、ちかに会つてお返ししたい。」

「源？」じやあ源次かとも知れぬ。」大勘の中年者は驚き引込んだ。眼八は徳島の研師の返で、源次の道具箱から盗んでおいた平糞である。

源次は大喜びで受け取つた。源次は大勘の愛弟子である。こいつをうまくあやつつて泥をはかせねばと、眼八は手をつくしたたが、真相がつかめない。どこかで更下源次を乳折しようと考え、「一杯めらう」と連立つて、二人は夜の新中に出た。そして足及至山薬王寺の幽境に入った。昏間なら通路で賑わうことも、夜更けとあつて人影は全然ない。物音も聞こえない。

厄年の男女が厄除祈願に登り降りする三十三段、四十二段の急坂を上りつめると、日和佐川の川口が美しく輝いて見える。源次をひっぱたくには純好の時と場所である。

眼八は、かくし持つていた捕鯉でいきなり源次をひっくくり、その鯉尻で襲いかかつた。

「おい、源次。」何だ旅の人は初まり、濃味を帯びた二人である。平糞の一件から源次も興奮、「あの二振りの刀はどうした。どこで誰に渡したか。」

源次は初めて「こいつ、徳島から来た阿つ引きな」と知り、手拭いにくるんだ平糞を——と思つたが、自由が利かない。いつ、どこから飛んで来たのか、源次には捕鯉がからむついている。

「あの二振は誰に渡した、その者の隠れ場所を言え、知らぬ存せぬで良ゆるされないぞ」と、足蹴りがつづく。源次は、こつたつてはもうどうにも手の施しようがない。痛苦に歯を食いしばるだけ。拷問に拷問、全く絶体絶命、鯉尻をつかんた眼八は、男坂・女坂をそびきながらひきすり落とす。さすがの源次も覚悟を決めて、親方

の大勘は日すまぬが、要するに四五十年前の深夜、陸の山窩、海の抜荷屋といわれ海上の漂泊者、雲船から禁制の火薬や兵器を密買して暴利をむさぶる無頼の徒党、瀬戸内を根城に、河波近海でも手のつけられぬ海賊集団、蜂須賀家でも徳島や日和佐の代官や、出先目付でどうにもならぬ無法無頼の徒党が、ひそかに二人の漂流者を大勘の家へ連れて来たことだけを告げた。

眼八も、相手が抜荷屋ではどうにもならぬ。徳島が代官所の白洲まで突き出す外はないと考えながら、拷問はゆるめない。とうとう板の下り平地まで、石ころでもこずるようになり下りて来た。源次もさすがに四苦八苦、体中がうづく。

その一瞬、町の方から御用提灯と十手をひらわかし、捕手らしい十数人が、一人の旅人らしいものを追って来る。さらには尚走り寄る一団がある。多分徳島からの同心である。

一人の旅人を囲んで、前後の捕手の二団、忽ちにして大乱闘、広くもない山門内は、刻々死人や手負いで埋ま

つた。源次がつかずかに眼をあげて見ると、それは留守だった大勘がどこからか立ち帰って、わが邸にも寄らず、この薬王寺へ向ったことを知って、日和佐の捕手、それに徳島から彦根に來ていたその達が、追尾して來たの混戦である。物凄いこと、この世のこととも思われぬ。大勘の腕も凍えている。さすがの眼八も、自分ひとり源次にかまっ

ては居られない。縄尻を放って逃げるに如くはないと、捨鉢になつて覚悟を決めた。眼下の乱闘、死闘、刻々死傷者が重なり合うばかり、大勘は凄じ腕だ。眼八はどの方向に逃げようかと、左顧右盼。

折も折、石段の片側から、白衣をまとつた通路の、夜詣りかと思われ人の姿が、ゆつくりと立っている。しかしその手には抜身が握られている。法月玄之丞である。彼は、堂々と玄之丞である旨を名乗って、この殺陣の渦中に踊りこんだ。大勘は勿論、氣を失ったかで見えた源次も生気千倍、寄せ来る相手に立ち向つた。

折から又々どこから来たのか白装束の女人、それはお綱である。彼女も一刀を抜いている。四人は一団となられては、さすがの捕手方がいかに秘術をつくしても勝てる相手ではない。じりじり後退するばかり。玄之丞からは最後の一人まで生かしてはおかぬと追討をかける。かくて幾人かは所の方を落ちたようだが、この聖域は木曾育の修羅となつていた。

このまま夜の明けるとここに居ては、海部の捕手がまた押し寄せて来ることは必定、大勘と源次の東道へ兼ねて、裏山の雑木林にわけ入り、土佐街道の寒葉へと登って消えた。そしてそのまま、四人の消息は不明となつてしまつた。

(追記) その後四人は剣山をめざして、道なき坂と艱難苦行、西方にそびゆる高い山嶺を目あて、一方徳島の藩邸で且、玄之丞お綱の生存が確認された以上、剣山に向うに相違ないと、山崎、宇野、石室、藤原、見張など、總力をあけて剣山に集結、吉野川沿いに、剣山には道も開けていた。

お十夜衆兵衛、天堂一角、旅川馬場の一回も、玄之丞阿波漂着生存の確証は不明だが、いざれ生きて居れば剣山の上には相違ないと、一足先に石室の近くまで着いていた。

剣山石室の乱闘の末、鳴所悲帖を手にした玄之丞は、まだまた安心できない。江戸に帰りつくまで、この葛藤はつづく。